

TJB 学生編集部特集：新入生歓迎委員会

新入生を歓迎すること

庄司 秀亮（筑波大学 生物学類 2 年、新歓副委員長）

昨年の 12 月頃から新入生歓迎委員(以後、新歓委員)のメンバーを募り始めた。自分は 4 月に自身が先輩たちに歓迎されていたときからやろうと決めていたのですぐにメンバーに加わった。

「新歓」と聞くと連想するのは 4 月、1 年生が大学に入学した際の時期を想像すると思う。普通はそうなのだと思う。自分自身も新歓委員になるまではそうだった。なってみるとガラリと変わる。新歓委員は 12 月には動き始める。自分たちが初めて臨む 2 学期のテスト期間、まだ 1 年生の自分たちが、来年の 4 月に入学してくる見えない 1 年生相手に動き始める。新歓委員の中で代表者である委員長、副委員長、班長などを決めていき、各自で働く形になった。自分は副委員長だった。副委員長、といっても実際は仕事がほぼなかったに等しい。本来は新歓の全責任を負う委員長をサポートするのが役割だろう。振り返ってみると、仕事が少なかったのは、委員長がプレッシャーをものとしないうほどしっかりしていたおかげだ。班長は、昨年の各々の班の担当だった先輩と連絡を取り、今年の日程や予算案、宿の予約や備品の作成や買い出しを行う。一人で決断を下さなければならないような時もあった。委員が賛成する時もあれば文句を言うってしまうような時もあった。

新歓委員の仕事を通して今まで話す機会の少なかった人とも意見の交換をした。今までとは違った新たな考え、見方を知るこ

とができた。大袈裟だが、新たな考えを知ることにより新歓も自分も良くなっていく感じがした。だから、同じような考えや見方をする人の集まりによる新歓はうまくいかないだろう。意見は偏ったものだろうし、新入生と考えが全く違っていたら新入生にとってその新歓はうとうしいものでしかないだろう。新入生は全国各地、様々な環境で育ってきた人たちがいる。一人にとって常識であるものは一人にとって常識ではない。一人の意見がみんなの意見ではない。だからこそ新歓委員はただの学類内で仲のいい人の集まりになってはいけない。また、友人とも意見を対立させてしまうこともあるだろう。そんなとき、どちらが正しいなんてことで終わらせないでほしい。相手の立場からも考え、自分の意見を見直してほしい。自分の意見が、誰から見ても本当に根拠ある正当なものであるかを考えてほしい。

新入生は新歓を通じて大学のこと、先輩たちのこと、同じ新入生のことを知ることができる。同時に、新歓委員は新歓を通して人間的に大きく成長できる。様々な人と意見を交わし、互いの意見をよく知り、自分の考えを見直すことができる。そんなことを頭の片隅にでも置きながら、来年の新歓も新入生・新歓委員の双方にとって素晴らしいものにしてみたい。

Communicated by Shinobu Satoh, Received August 13, 2008.